



### 子どもの未来を変えるため 小学校を建設

アフリカ東部に位置するウガンダの首都カンパラから、車で1時間半ほど走ったナツケデ村には、ちよつと変わった名前の小学校がある。それは「Peace小学校」。学校名が書かれた看板の下には「Hokkaido Donors Japan」という表記も見える。この小学校は北海道札幌市を拠点にエイズ孤児の就学支援を行っているNPO法人Peaceが設立したものだ。現在、約300人の児童が通い、Peaceでは教科書や文具、蚊帳の配布など、ニーズに応じた支援を継続中だ。Peaceの理事長を務める山岸育美

さんは、実は長年シンガーソングライターとして活動している。それと小学校建設がどう結びついたので、山岸さんはそのきっかけについてこう語る。「私の歌の師匠がアフリカ系アメリカ人だったので、こんな遺言を残しました。『歌の仕事を通して、アフリカなど貧しい国の人々の役に立ちなさい』と。そこで私は2002年にチャリティコンサートを開催し、その収益金でアフリカに小学校を建てることにしたので。それがPeaceの活動の始まりでした。」

アフリカの中でもウガンダを支援先に選んだのは、貧困のために学校に通えないエイズ孤児が多いという現状を偶然知ったから。1990年代初頭、ウガンダでは15〜49歳人口のHIV／エイズ感染率が約10%を記録。09年には5・6%に下がったものの、現在でもHIV／エイズにより親を失った子どもたちは100万人以上いるとされる。「エイズ孤児たちは親戚に引き取られることが多いのですが、貧しい家庭が多く、小学校に通える子はほとんどいません。教育を受けられなければ文字が読めず、公用語である英語を勉強する機会もないため、成長しても仕事に就くことが難しい。そして、HIV／エイズの感染予防方法など、自分を守る正しい知識も持てないのです。」子どもたちが貧困から抜け出し、自立して生きていくためには、まず教育が必要なのではないか。そこでエイズ孤児たちの就学支援のため、Peace

# PLAYERS

国際協力の担い手たち

## NPO法人 Peace

# エイズ孤児たちに 教育のチャンス

HIV／エイズで、親を失った子どもたちが自立し、新しい未来をつかむために必要なもの。それは教育。NPO法人Peaceでは、ウガンダのエイズ孤児たちの就学支援を続けている。



JICA基金を活用して、キグング小学校に通えることになった子どもたちに文房具を配布するアヤジカさん



eは首都カンパラ近郊の3つの小学校を主な対象に、9年間にわたって活動してきた。

### 教育のチャンスを広げて 自立を促す

山岸さんらは札幌にベースを置き、年に数回ウガンダを訪れる。普段は現地と綿密に連絡を取り合い、ニーズを把握しているが、その際に重要な役割を果たすのが、現地スタッフのアヤジカ・モゼさん。かつて彼も貧しいエイズ孤児で、学校に通うことができなかった。しかし、日本のNGOの里親制度のおかげで高校まで進学。日本への恩返しとして、Peaceの活動に賛同し、協力してくれることになった。「大



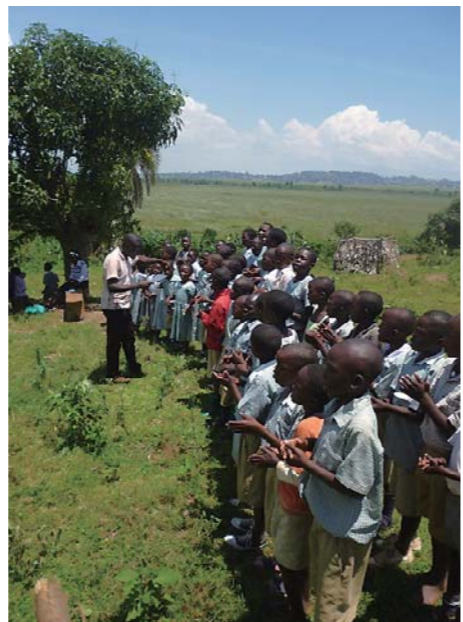
Peaceの活動を視察するスタディーツアーも実施。不登校に悩む日本の若者が参加し、人生を見つめ直すことができたケースもあった(撮影:國森康弘)

人になったら、自分と同じ境遇のエイズ孤児たちを助けたいと思っていたんです。そう話すアヤジカさんは、今ではPeaceの連携になくてはならない存在だ。

エイズ孤児たちが、アヤジカさんのように教育を受け、自立した大人に成長してほしい。それを支える里親制度とは、エイズ孤児の教育費を負担してくれる里親を日本で募るもの。基本的にウガンダでは義務教育は無料だが、教材費や制服代などを工面できない家庭も多いのだ。里親制度によりキグング小学校に通えるようになった一人、レティシカ・ナカジさんは、「将来は看護師になって家族や近所の人を助けたい」と夢を話してくれた。

しかし、キグング村には学校に通えないエイズ孤児たちがまだ多いことから、PeaceはJICA基金を活用。これにより、新たに90人の子どものために学校に通えるようになった。「教育を受けなくても14歳になってしまった子どもは、彼らが文字を覚え、少しずつ英語を話し、スタッフのパソコンから簡単なメッセージを送ってくれるまでに成長したのを見ると嬉しいですね」と山岸さんは話す。また、Peaceは近隣のナマリー

山岸さんの知人が作詞作曲した「One Earth」を孤児たちが歌い、それをCD化するプロジェクトも進めている。シンガーソングライターである山岸さんならではのアイデア



ナマリー小学校に通う孤児たちが一つ一つ手作りしたストラップは日本で販売され、その収益金は学校の整備などに使われる(撮影:國森康弘)

「ウガンダでの活動を通じ、日本を見直し、忘れかけている大切な心を取り戻すきっかけにもなりました」とPeace理事長の山岸さん(撮影:國森康弘)



小学校とも連携。ここでは青年海外協力隊員の指導の下、孤児たちが「幸せのおまもり」としてストラップを作っている。それをPeaceが仕入れ、日本でのチャリティコンサートなどで販売。その収益金を教育費に当てたり、養豚場を建設して学校の維持費を確保するなどして同校に還元している。さらに、この学校の隣には職業訓練所を備えた孤児院を建設中。身寄りのない60人の孤児たちの「未来を創る」ための場所にするべく、裁縫や土木などウガンダで必要とされている技術を身に付けられる体制を整えていく予定だ。「エイズ孤児であっても、自分の力で素晴らしい未来を手に入れることができるはず。そのための第一歩として教育が重要なのです」と山岸さん。必要とされている支援を、今、できることから。この思いを胸に、Peaceはエイズ孤児たちの未来を拓くサポートをしていく。